

CentreNET[®] X Vision
ユーザーマニュアル
インストール編

ご注意

本書の中に含まれる情報は、弊社（アライドテレシス株式会社）が保有しています。弊社の同意なく本書の全体もしくは一部をコピーまたは転載しないでください。

弊社は、予告なく本書の全体もしくは一部を修正または改訂することがあります。あらかじめご了承ください。

弊社は、改良のため予告なく製品の仕様を変更することがあります。あらかじめご了承ください。

本製品の内容またはその仕様に関連して発生した結果については、いかなる責任も負いかねますのであらかじめご了承ください。

Copyright © 2001 アライドテレシス株式会社

商標について

CentreNET は、アライドテレシス株式会社の登録商標です。

UNIX は、X/Open カンパニーリミテッドがライセンスする米国ならびに他の国における登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT は、米国 Microsoft Corporation の米国ならびにその他の国における登録商標です。

HP は、米国 Hewlett-Packard Company の商標または登録商標です。

Intel、Pentium はインテルの登録商標です。Celeron はインテルの商標です。

その他、本書に記載されている会社名、製品名等は、各社の商標または登録商標です。

マニュアルバージョン

2001年2月 初版

目次

ご注意	2
商標について	2
マニュアルバージョン	2
1 概要	5
1.1 特長	6
1.2 製品構成 / パッケージ内容	9
1.3 動作環境	10
2 インストール	11
2.1 インストールの前に	12
2.2 セットアップオプション	13
2.3 インストール	14
2.3.1 CD-ROM インストール	14
2.3.2 ネットワークインストール	23
2.3.3 自動インストール	28
2.4 追加インストール	33
3 動作確認	35
3.1 コントロールパネルの確認	36
3.2 Vision サービスの動作確認	37
3.3 トランスポートの確認	38
3.4 接続先 UNIX ホストの確認	39
3.5 セキュリティオプションの確認	41
3.6 X クライアントの起動	43
3.6.1 XDM からの起動	43
3.6.2 UNIX アプリケーションウィザードからの起動	47
3.6.3 RPS (Remote Program Starter) からの起動	52
3.7 補足 : X Vision の最適化	56
4 アンインストール	57
5 ライセンスアップグレード	59
5.1 X Vision から X Vision Cubic へのアップグレード ...	60
5.2 お試し版からライセンス版へのアップグレード	61

6 注意 / 制限事項	63
6.1 注意事項 / 制限事項	64
6.1.1 インストール / アンインストール	64
6.1.2 X Vision サーバー	64
6.1.3 ゾーン	65
6.1.4 XVision スパイ	65
6.1.5 端末エミュレータ	65
6.1.6 ホストエクスプローラ / ホストマネージャ	66
6.1.7 マルチユーザー Windows 環境	66
6.1.8 X Vision Cubic 固有の制限事項	66
6.1.9 サポート対象外の機能	66
6.2 既知の問題点	67
6.2.1 オンラインヘルプ	67
6.2.2 ホストエクスプローラ / ホストマネージャ	67
6.2.3 端末エミュレータ	68
6.2.4 ゾーン (仮想デスクトップ)	68
6.2.5 CentreNET AT-TCP/32 シリーズ	68
6.2.6 X Vision Cubic 固有の問題点	69

1 概要

このたびは、CentreNET X Vision（以下、X Vision）をお買い上げいただきまして誠にありがとうございます。X Vision は、「ハイパフォーマンス」、「Windows[®] との高い親和性」、「優れた日本語環境」などの特徴を持つ、Windows 95/98/2000/Me/Windows NT[®] 3.51/Windows NT 4.0 対応の 32 ビット X サーバソフトウェアです。Windows デスクトップから、UNIX 上で動作する X アプリケーションを使用できるため、UNIX システムと Windows システムが混在するネットワークを容易に構築することができます。

本書「CentreNET X Vision ユーザーマニュアル・インストール編」では、X Vision の概要、インストール方法から初期設定、X クライアント起動までの基本的手順、および、X Vision の制限事項やご使用時の注意点などについて説明しています。インストールの前に必ずご一読くださいますようお願い申し上げます。

なお、各機能の詳細や高度な使い方については、CD-ROM 収録の「CentreNET X Vision ユーザーマニュアル・かんたん編」および「CentreNET X Vision ユーザーマニュアル・詳細編」をご参照ください。

Topics:

特長 (p.6)

製品構成 / パッケージ内容 (p.9)

動作環境 (p.10)

1.1 特長

X Vision には、次のような特長があります。

1.1.1 革新的テクノロジー

複数の X サーバーの同時実行

接続先の UNIX ホストにあわせて、X サーバーの設定（プロファイル）を複数作成できます。また、設定の異なる X サーバーを複数同時に起動することができます。

Web ブラウザからの X アプリケーション起動

Web ページ上のリンクをクリックするだけで、X アプリケーションを起動できます。複数のユーザー、X サーバーに対して、X アプリケーションを起動するための共通インターフェースを提供できるため、システム管理が容易になります。

ゾーン（仮想デスクトップ）

複数のゾーン（仮想デスクトップ）を作成し、ゾーンごとに X アプリケーションを表示できます。

OpenGL（X Vision Cubic のみ）

CentreNET X Vision Cubic は、3D デザインにおいて主流となりつつある OpenGL（OpenGL 1.1/GLX 1.2）に対応しており、OpenGL を使用する X アプリケーションが利用できます。

マルチモニター機能

Windows 98/Me/2000 の「マルチモニター機能」に対応しています。より広いデスクトップが使用できるため、Windows、X アプリケーション混在の作業環境を向上させます。

1.1.2 ハイパフォーマンス

OSF/Motif Window Manager を PC 側に実装

業界標準のウィンドウマネージャである OSF/Motif Window Manager をローカル（PC 側）に実装しているため、シングルウィンドウモードにおけるウィンドウ管理のネットワーク負荷、オーバーヘッドをなくし、高いパフォーマンスを実現します。

PC 性能に合わせた描画ロジックの最適化

X Vision は、完全に 32 ビット化された PC 用 X サーバーです。付属ユーティリティにより PC の性能を調べ、最大限の性能を発揮できるよう描画ロジックを最適化します。

1.1.3 Windows との高い親和性

Windows の日本語入力システムに対応

Windows の日本語入力 (MS-IME、ATOK、OAK など) を使って、UNIX アプリケーションや X クライアントに日本語を入力できます。Windows と UNIX で入力インターフェースを切り替えるストレスがありません。

コピー & ペースト

グラフィックはもちろん、日本語文字を UNIX と Windows の間で相互にコピー & ペーストできます。

さまざまな X クライアントの起動方法

次のような場所から X クライアントを起動できます。

- スタートメニューから
- ショートカットから
- Web ブラウザから
- UNIX コンソールから

UNIX ホストエクスプローラ

ネットワーク上の UNIX コンピュータを一覧表示し、Windows と同じフィードバックで、UNIX ファイルシステム上でのファイルコピーなどが行えます。

Windows の GUI に完全準拠

X サーバーの各種設定やオンラインヘルプの閲覧などを、Windows 標準のスタイルで行うことができます。

1.1.4 その他

True カラー、疑似カラーをサポート

インテリジェント・カラーマッチングにより、X クライアントのカラーをより忠実に再現します。

3 ボタンマウスのエミュレーション

2 ボタンマウスを 3 ボタンマウスのように使用できます。

XDM (X Display Manager) のサポート

X 画面でログインする XDM をサポートしています。

マルチとシングル、2 つのウィンドウモード

マルチウィンドウモードでは Windows がウィンドウを管理、シングルウィンドウモードでは UNIX 上のウィンドウマネージャ、あるいは、X Vision 付属のローカル Motif ウィンドウマネージャ (MWM) によってウィンドウを管理します。

1600 × 1200 ピクセルまでの仮想領域を使用可能

VT420 エミュレータ付属

フォント代替・学習機能

Windows と X のフォント環境の違いに柔軟に対応できます。

UNIX から PC、PC から UNIX への印刷が可能

X アプリケーションからローカル PC に接続されたプリンタへ出力できます。また、ローカル PC から UNIX に接続されたリモートプリンタへの出力もできます。

グラフィカルなキーマップエディタ

グラフィカルなキーマップエディタにより、X キーマップの作成を簡単に行うことができます。

Focus Follows Mouse のサポートマウス

ポインタの下にあるウィンドウに自動的にフォーカスが当たる機能です。インテリポイントマウスにも対応しています。

Automatic フォントコンパイラ

必要なフォントを自動的にコンパイルする Automatic フォントコンパイラを搭載しています（日本語未対応）。

1.2 製品構成 / パッケージ内容

X Vision の製品パッケージには、次の種類があります。また、下記製品のそれぞれについて、ライセンス数が 1、10、50、100 のバリエーションがあります。

CentreNET X Vision (通常版 X サーバー)

CentreNET X Vision Cubic (3D 対応 X サーバー)

新規ご購入の方を対象とした通常製品です。

<パッケージ内容>

- CD-ROM 1 枚
- ソフトウェア使用許諾権契約書 (封筒)
- シリアル番号 / 認証キーシール
- ライセンス番号シール

CentreNET X Vision Version Up (通常版 X サーバー)

CentreNET X Vision Cubic Version Up (3D 対応 X サーバー)

CentreNET X Ver.1.0/2.0/2.1 をお持ちの方を対象としたバージョンアップ製品です。シリアル番号と認証キーは、旧バージョンのものがそのままお使いになれます。

<パッケージ内容>

- CD-ROM 1 枚
- ソフトウェア使用許諾権契約書 (封筒)
- ライセンス番号シール

CentreNET X Vision Cubic Upgrade (3D 対応 X サーバー)

CentreNET X Vision Ver.7.3(通常版 X サーバー)から CentreNET X Vision Cubic Ver.7.3 (3D 対応 X サーバー) にアップグレードするためのライセンスです。CentreNET X Vision Ver.7.3 をお持ちの方が対象です。

ライセンスをアップグレードする際に、X Vision をインストールしなおす必要はありません。ライセンスアップグレードの手順については、60 ページの「5.1 X Vision から X Vision Cubic へのアップグレード」をご覧ください。

<パッケージ内容>

- ソフトウェア使用許諾権契約書 (封筒)
- ライセンス番号シール

1.3 動作環境

X Vision の動作環境を以下に示します。

コンピュータ機種	<ul style="list-style-type: none"> • OADG 準拠 PC/AT 互換機 (DOS/V) • NEC PC-9800 シリーズ • NEC PC98-NX シリーズ
CPU	Pentium 以上 (使用する OS の要件に依存します。Celeron 466MHz 以上を推奨)
メモリ容量	<ul style="list-style-type: none"> • Windows 95/98 : 16MB 以上 (64MB 以上を推奨) • Windows 98SE : 24MB 以上 (96MB 以上を推奨) • Windows NT/2000/Me : 32MB 以上 (128MB 以上を推奨)
ディスク容量	標準構成で 25MB 以上
オペレーティングシステム (OS)	<ul style="list-style-type: none"> • 日本語版 Microsoft Windows 95 • 日本語版 Microsoft Windows 98 (98SE を含む) • 日本語版 Microsoft Windows NT 3.51 (SP5)[†] • 日本語版 Microsoft Windows NT 4.0 (SP4 以上) • 日本語版 Microsoft Windows 2000 • 日本語版 Microsoft Windows Me
ネットワーク	Windows 標準装備の TCP/IP プロトコルスタック
その他	CD-ROM ドライブ、LAN アダプター

[†] CentreNET X Vision(通常版 X サーバー)のみ対応。CentreNET X Vision Cubic (3D 対応 X サーバー)は、Windows NT 3.51 上では動作しません。

2 インストール

ここでは、X Vision をコンピュータにインストールする方法について説明します。

Topics:

- インストールの前に (p.12)
- セットアップオプション (p.13)
- インストール (p.14)
- 追加インストール (p.33)

2.1 インストールの前に

X Vision のインストールを始める前に、以下の各項目について確認してください。

必要動作環境の再確認

X Vision をインストールしようとしているコンピュータが、必要動作環境の要件を満たしているかどうか、10 ページの「1.3 動作環境」でもう一度お確かめください。

LAN アダプター

X Vision をインストールしようとしているコンピュータに、LAN アダプター (ネットワークアダプター) およびそのドライバーが正しくインストールされていることをご確認ください。

TCP/IP プロトコルスタック

X Vision を使用するには、TCP/IP プロトコルスタックが必要です。「TCP/IP」がインストールされていること、IP アドレスや名前解決等の設定が正しく行われており、UNIX ホストとの間で TCP/IP による通信ができていることを確認しておいてください。

制限事項 / 注意事項の確認

63 ページの「6 注意 / 制限事項」で、X Vision の制限事項および使用上の注意点についてご確認ください。

2.2 セットアップオプション

X Vision のインストール方法には、次のような種類があります。

CD-ROM インストール (1 ユーザー向け)14 ページ

CD-ROM から PC のハードディスクにインストールします。一台の PC にインストールする場合の標準的な方法です。次のオプションがあります。

標準	もっとも一般的なオプションでインストールします。インストール先の指定はできません。また、ローカル Motif ウィンドウマネージャなどのオプションコンポーネントはインストールされません (後から追加可能)。
カスタム	インストール先やインストール項目を選択したい場合に使います。
コンパクト	X Vision の動作に必要な最低限のファイルだけをインストールします。
CD	ユーザー個人用のファイルだけをコピーし、X Vision 自体は CD-ROM から実行します。
ネットワークアドミニストレータ (24 ページ)	ネットワークインストール (後述) に必要なファイル一式を、ファイルサーバー上の共有フォルダにコピーします。これ自体は実行環境を構築するためのものではなく、ネットワークインストールの準備を行うためのものです。また、自動インストール (後述) 用スクリプトを作成するときにも選択します。

ネットワークインストール (複数ユーザー向け)23 ページ

ネットワーク共有フォルダからインストーラを起動して、PC のハードディスクにインストールする方法です。あらかじめ、管理者が CD-ROM から「ネットワークアドミニストレータ」セットアップを実行し、必要なファイル一式をサーバーにコピーしておく必要があります。複数ユーザーライセンスをお持ちの場合に便利です。以下のオプションがあります。

標準	(CD-ROM インストールと同じ)
カスタム	(CD-ROM インストールと同じ)
コンパクト	(CD-ROM インストールと同じ)
ワークステーション	ユーザー個人用のファイルだけをコピーし、X Vision 自体はファイルサーバーから実行します。

自動インストール (複数ユーザー向け)28 ページ

ネットワークインストールの一種で、管理者が作成しておいた「スクリプト」にもとづいて、ネットワーク共有フォルダから PC のハードディスクに半自動的なインストールを行います。スクリプトでは「インストールするコンポーネント」や「インストール先」などを指定できるため、複数の PC に同じ環境をインストールしたい場合に便利です。あらかじめ CD-ROM から「ネットワークアドミニストレータ」セットアップを実行して、共有フォルダ上にセットアップファイル一式をコピーしておき、さらに、再度「ネットワークアドミニストレータ」セットアップを実行し、インストールスクリプトを作成しておく必要があります。

2.3 インストール

2.3.1 CD-ROM インストール

CD-ROM からインストールするための手順を示します。ここでは「標準」および「カスタム」セットアップの手順だけを示します。「コンパクト」および「CD」セットアップも、以下の説明とほぼ同様ですので、画面の指示にしたがってインストールを行ってください。また、「ネットワークアドミニストレータ」セットアップについては、24 ページの「「ネットワークアドミニストレータ」セットアップ」をご覧ください。

1. コンピュータの電源を入れ、Windows を起動します¹。すでに起動されている場合は、使用中のアプリケーションをすべて終了させてください。
2. CD-ROM ドライブに X Vision の CD-ROM をセットします。
3. 自動実行でインストーラが起動します。² 「Install」をクリックしてください。



図 2.1

4. 「OK」をクリックします。



図 2.2

1. Windows NT または Windows 2000 をご使用の場合は、「Administrator」権限でログオンしてください。
2. Windows NT 3.51 をご使用の場合や、CD-ROM ドライブの設定で自動実行をオフにしている場合は、「プログラムマネージャ」または「スタート」メニューの「ファイル名を指定して実行」で、「D:¥SETUP.EXE」を実行してください（CD-ROM ドライブが「D:」の場合）。

5. お買い上げの製品ライセンスに応じて、3D 対応の CentreNET X Vision Cubic³ が、標準の CentreNET X Vision を選択し、「次へ」をクリックしてください。⁴



図 2.3

マルチユーザーの Windows 環境 (Windows NT、2000)⁵ では、図 2.3 のダイアログに「CentreNET X Vision ユーザ設定」の項目が追加されます (図 2.4 の青線で囲んだ部分)。

ここで「ユーザ単位で設定を保存する (推奨)」を選択すると、X Vision の設定をユーザーごとに保存できます。「すべてのユーザで同じ設定を使用する。既存の Vision の設定を保持したい場合は、こちらを選択してください」を選択すると、すべてのユーザーで同じ設定を使用します。



図 2.4

3. Windows NT 3.51 の場合、X Vision Cubic は選択できません。
4. X Vision Cubic は X Vision を含んでいますので、X Vision Cubic を選択すると、X Vision も自動的に灰色の選択状態になります。また、X Vision (通常版) をインストールした後に、X Vision Cubic (3D 対応版) にアップグレードすることもできます。詳しくは、60 ページの「5.1 X Vision から X Vision Cubic へのアップグレード」をご覧ください。
5. Windows 95/98/Me でも、コントロールパネルの「ユーザ」でマルチユーザーで使用する設定にすれば、Windows NT/2000 と同様となります。

6. セットアップオプションを選択し「次へ」をクリックします。通常は「標準」を選択してください。インストール先ディレクトリを指定したい場合やインストールする項目を選択したい場合は、「カスタム」を選択してください。セットアップオプションの詳細については、13ページの「2.2 セットアップオプション」をご覧ください。また、インストール後にコンポーネントを追加する方法については、33ページの「2.4 追加インストール」をご覧ください。



図 2.5

7. 「上記製品を評価用としてインストールする」のチェックをはずし、シリアル番号 (S/N)、認証キー (A/K)、ライセンス番号 (L/N) を入力してください (図 2.6 参照)。各番号は、次の場所に記載されています。

<p>CentreNET X Vision CentreNET X Vision Cubic (通常製品)</p>	<ul style="list-style-type: none"> シリアル番号と認証キー番号は、製品同梱の封筒 (ソフトウェア使用許諾契約書を兼ねる) に封入されているシリアル番号 / 認証キーシールに記載されています。 ライセンス番号は、同じ封筒に封入されているライセンス番号シールに記載されています。
<p>CentreNET X Vision VerUp CentreNET X Vision Cubic VerUp (バージョンアップ製品)</p>	<ul style="list-style-type: none"> シリアル番号と認証キー番号は、旧バージョン (CentreNET X Ver.1.0/2.0/2.1) のものをご使用ください。 ライセンス番号は、製品同梱の封筒に封入されているライセンス番号シールに記載されています。

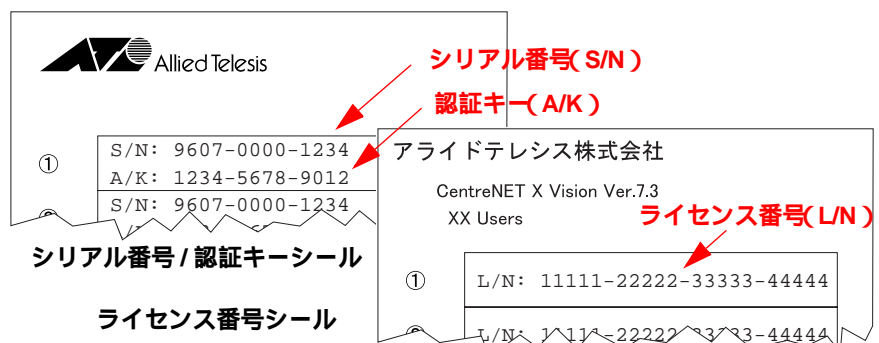


図 2.6

なお、お試し版としてインストールする場合⁶は、「上記製品を評価用としてインストールする」にチェックが付いていることを確認の上、番号を入力せずに「次へ」をクリックしてください。



図 2.7

8. 「はい」を選択し⁷、「次へ」をクリックしてください。⁸

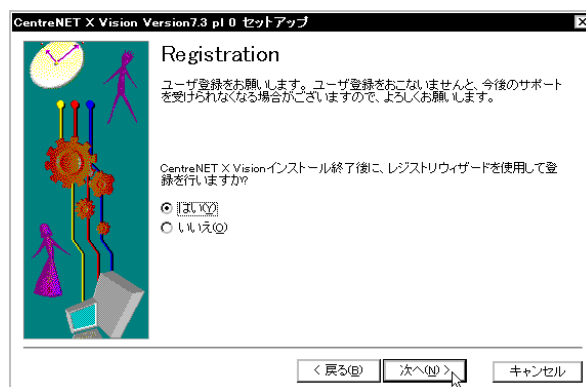


図 2.8

9. 「OK」をクリックします。

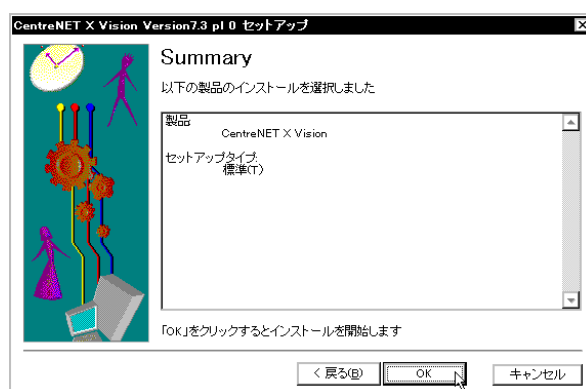


図 2.9

6. お試し版からライセンス版へのアップグレード方法については、61 ページの「5.2 お試し版からライセンス版へのアップグレード」をご覧ください。
7. Windows NT 3.51 ではウィザードによるユーザー登録ができないため、ここでの選択はできません。「次へ」をクリックして次に進んでください。その場合のユーザー登録の方法については、ダイアログの説明文または脚注 14. (p.22) をご参照ください。
8. ユーザー登録を行わないと、ユーザーサポートや新製品情報の提供などが受けられません。忘れずにユーザー登録を行ってください。

10. InstallShield が起動します。ここで圧縮ファイルの展開を行います。ご使用のコンピュータによっては数分間かかることがあります。しばらくお待ちください。

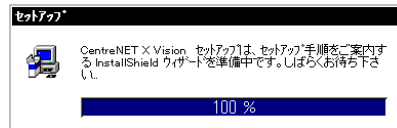


図 2.10

11. 使用権許諾契約書をよくお読みになり、同意されるなら「はい」をクリックしてください。同意できない場合は「いいえ」をクリックします。その場合、セットアップは中止となります。

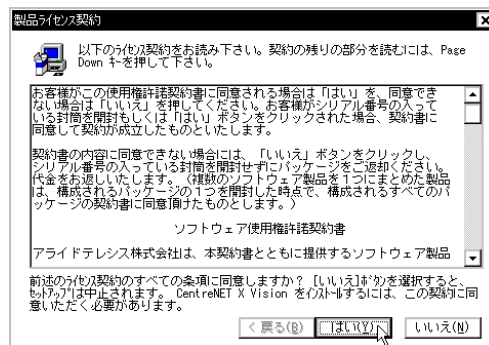


図 2.11

12. インストール先ディレクトリを指定し、「次へ」をクリックします（「カスタム」セットアップのみ）。

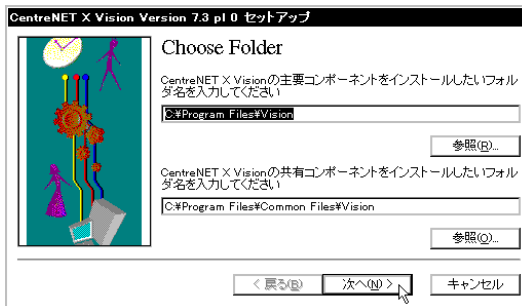


図 2.12

13. インストールするコンポーネントを選択し、「次へ」をクリックします（「カスタム」セットアップのみ）。

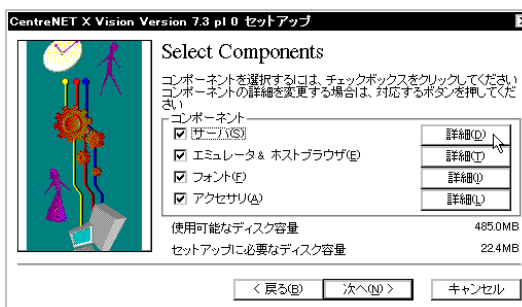


図 2.13

14. ファイルのコピーが始まります。



図 2.14

15. プログラムフォルダを選択し、「次へ」をクリックします（「カスタム」セットアップのみ）。



図 2.15

16. 続いて、X サーバーの基本設定をお手伝いするプロファイルウィザードが起動します。⁹ このウィザードの説明に答えていくことで、ご使用の UNIX 環境に適したデフォルトの設定（プロファイル）が作成されます。「次へ」をクリックしてください。

図 2.16

9. プロファイルの設定は、インストール後に行うこともできます。また、Windows NT 3.51 では、このウィザードは起動されません。インストール後にお使いの環境にあわせてプロファイルの設定を行ってください。プロファイルは複数作成することができます。ここで作成するのはデフォルトのプロファイルです。

17. ご使用の UNIX OS を選択して「次へ」へクリックします。該当する OS 名がないときは、「その他」を選択してください。



図 2.17

18. XDM (X Display Manager) を使用するかどうかを選択します。

特定の UNIX ホストに XDM ログインする場合は、「ダイレクトモード」を選択します。

XDM ログイン可能なホストが複数あるときは、「ブロードキャストモード」を選択すると、X サーバー起動時に XDM ログインできるホストの一覧が表示され、その中からログイン先を選択できます。

XDM を使用しない場合は、「使用しない」を選択してください。

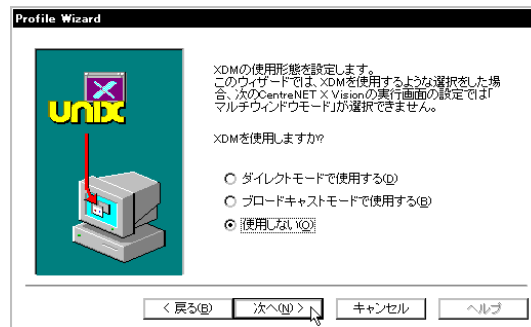


図 2.18

19. ウィンドウモードを選択します。

「シングルウィンドウモード」は、ひとつの大きなウィンドウの中に、複数の X クライアント (X アプリケーション) ウィンドウを入れ込むモードです。UNIX と同じウィンドウマネージャを使用したいときや、ローカル Motif ウィンドウマネージャ¹⁰を使用したいとき、および XDM を使用する¹¹は、必ず「シングルウィンドウモード」を選択してください。

「マルチウィンドウモード」は、ひとつひとつの X クライアントが他の Windows アプリケーションと同様に独立したウィンドウになるモードで

10. ローカル Motif ウィンドウマネージャを使用するには、「カスタム」セットアップを行う必要があります。「標準」セットアップではインストールされません。「標準」セットアップ後に、コンポーネントを追加する方法については、33 ページの「2.4 追加インストール」をご参照ください。
11. 手順 18. で「XDM を使用する」設定にした場合は、「シングルウィンドウモード」しか選択できません

す。マルチウィンドウモードの場合、ウィンドウマネージャは Vision Window Manager となります。

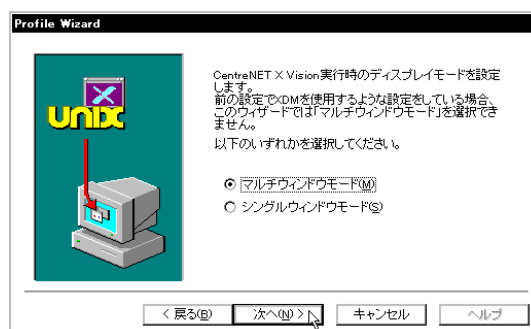


図 2.19

20. X クライアントへの日本語入力に、Windows の日本語入力¹² を使うかどうかを選択して、「次へ」をクリックします。



図 2.20

21. プロファイルの内容を確認して、「次へ」をクリックします。設定を変更したい場合は「戻る」をクリックしてください。



図 2.21

12. Windows の日本語入力を使用するためには、X クライアント側が X Vision のサポートする日本語入力インターフェースを備えている必要があります。X Vision は、kinput2、XIMP 3.5、XIM をサポートしています。

22. プロファイル名を指定します¹³。「常に使用するプロファイルとして設定する」のチェックを外すと、Xサーバー起動時にプロファイル選択のダイアログが表示されるようになります。

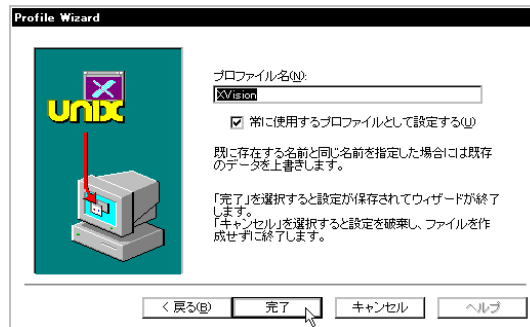


図 2.22

23. ユーザー登録の方法をご案内するレジストリウィザードが起動します。¹⁴「次へ」をクリックしてください。

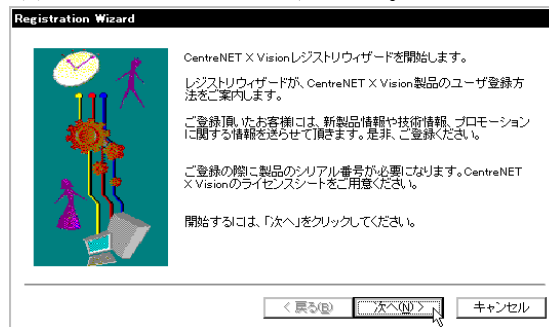


図 2.23

24. ユーザー登録の方法を「Web フォーム」¹⁵か「電子メール」から選んで「次へ」をクリックし、以後画面の指示にしたがってください¹⁶。

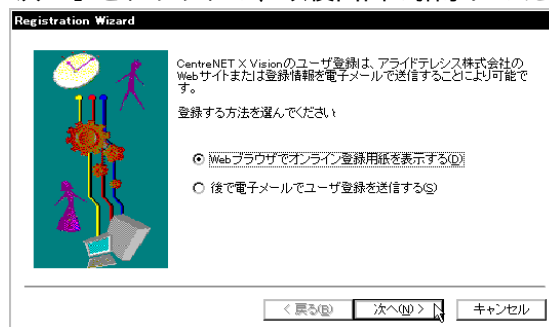


図 2.24

13. Windows NT では、プロファイル名は「XVision」固定となり変更できません（インストール後に変更することはできません）。
14. 手順 8. で「いいえ」を選択した場合は、このウィザードは起動しません。後から CD-ROM 内の「¥PC¥Win32¥cnetreg.exe」を実行してください。ただし、Windows NT 3.51 ではこのウィザードを使用できませんので、CD-ROM 内「¥docs¥user¥support」にある登録フォームの雛形に必要事項をご記入の上、service@allied-telesis.co.jp までご送付ください。
15. Web フォームで登録するには、Web ブラウザで弊社 Web サイト(<http://www.allied-telesis.co.jp/>) にアクセスできる環境が必要です。
16. (訂正) 画面ではメール送付先が「support@allied-telesis.co.jp」となっていますが、正しくは「service@allied-telesis.co.jp」です。こちらにお送りくださいますようお願い申し上げます。

25.「完了」をクリックします。

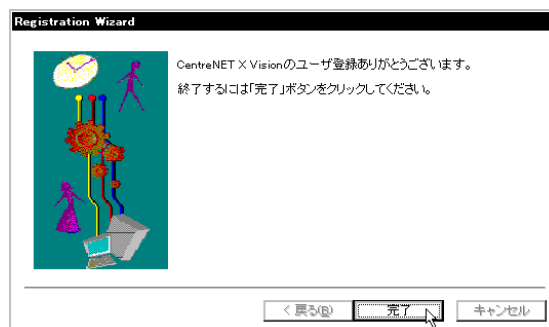


図 2.25

26.「OK」をクリックします。

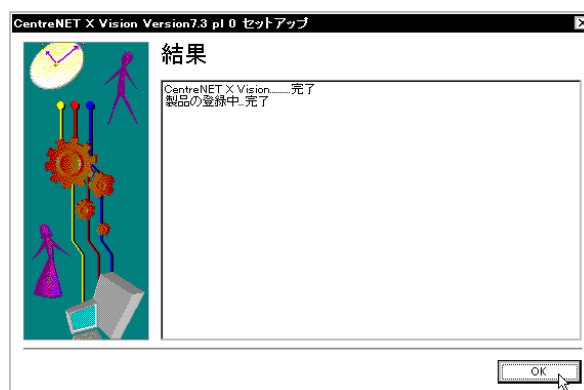


図 2.26

27. 以上でインストールは完了です。「はい」をクリックして、コンピュータを再起動し¹⁷、35 ページの「3 動作確認」にお進みください。

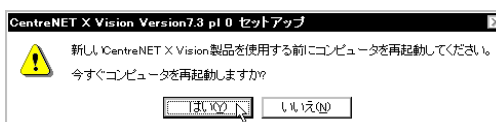


図 2.27

2.3.2 ネットワークインストール

ネットワークインストールは、ファイルサーバー上の共有フォルダからインストーラを起動して、各 PC のハードディスクにインストールする方法です。ネットワークインストールを行うためには、あらかじめ管理者が CD-ROM から「ネットワークアドミニストレータ」セットアップを実行しておく必要があります。ネットワークインストールの手順は次のとおりです。

1. 「ネットワークアドミニストレータ」セットアップを実行し、共有フォルダにセットアップファイル一式をコピーする（最初の一回だけ）
2. 各 PC から共有フォルダ上のインストーラを起動してインストールを行う（必要な回数繰り返す）

17. コンピュータをサーバーとして使用している場合は、「いいえ」をクリックしてインストーラを終了させ、必要な処置を行ってから、コンピュータを再起動してください。

各 PC へのインストール手順自体は、セットアップファイルが共有フォルダ上にあるという点を除き、CD-ROM インストールとほぼ同じです。なお、スクリプトによって半自動的なインストールを行う「自動インストール」の方法については、28 ページの「2.3.3 自動インストール」で説明します。

「ネットワークアドミニストレータ」セットアップ

ここでは、ネットワークインストールの準備として、CD-ROM からファイルサーバー上の共有フォルダにセットアップファイル一式をコピーする手順を示します。

1. CD-ROM ドライブに X Vision の CD-ROM をセットします。
2. 自動実行でインストーラが起動します。¹⁸ 「Install」をクリックしてください。



図 2.28

3. 「OK」をクリックします。



図 2.29

18. Windows NT 3.51 をご使用の場合や、CD-ROM ドライブの設定で自動実行をオフにしている場合は、「プログラムマネージャ」または「スタート」メニューの「ファイル名を指定して実行」で、「D:\SETUP.EXE」を実行してください（CD ドライブが「D:」の場合）。

4. お買い上げの製品に応じて、3D 対応の CentreNET X Vision Cubic が、標準の CentreNET X Vision を選択し、「次へ」をクリックしてください。

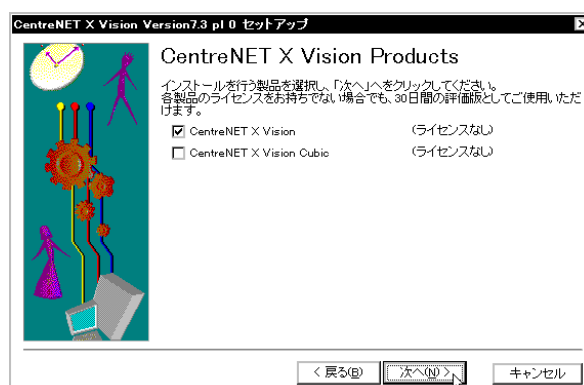


図 2.30

マルチユーザーの Windows 環境 (Windows NT、2000)¹⁹ では、図 2.30 のダイアログに「CentreNET X Vision ユーザ設定」の項目が追加されます(図 2.31 の青線で囲んだ部分)が、ここでは共有フォルダにセットアップファイルをコピーするだけです。この設定は意味を持ちません。デフォルトのまま「次へ」をクリックしてください。



図 2.31

5. 「ネットワークアドミニストレータ」を選択して、「次へ」をクリックします。



図 2.32

19. Windows 95/98/Me でも、コントロールパネルの「ユーザ」でマルチユーザーで使用する設定にすれば、Windows NT/2000 と同様となります。

6. セットアップファイル一式を置くネットワーク共有フォルダのパスを入力して、「次へ」をクリックします。「参照」をクリックすれば、ダイアログから共有フォルダを選択することもできます。



図 2.33

7. 「はい」を選択し、「次へ」をクリックしてください。²⁰



図 2.34

8. 「OK」をクリックしてください。

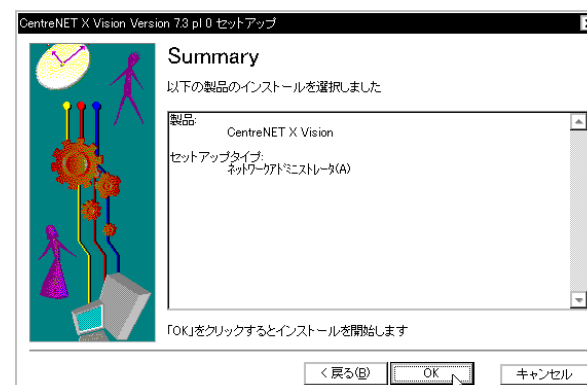


図 2.35

20. ユーザー登録を行わないと、ユーザーサポートや新製品情報の提供などが受けられません。忘れずにユーザー登録を行ってください。

9. InstallShield が起動します。ここで圧縮ファイルの展開を行います。ご使用のコンピュータによっては数分間かかることがあります。しばらくお待ちください。

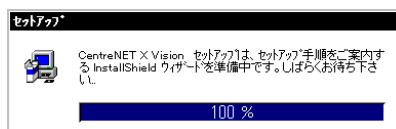


図 2.36

10. インストール先の共有フォルダを確認してください。インストール先を変更したいときは、「パスの変更」をクリックします。ファイルのコピーを開始するには、「インストール」をクリックします。

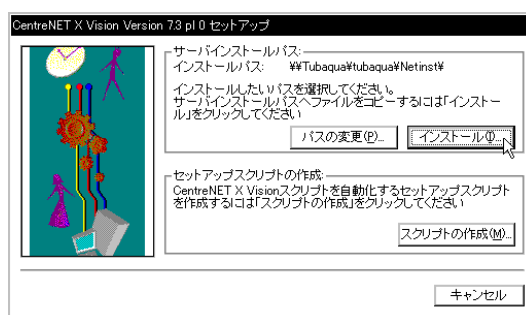


図 2.37

11. ファイルのコピーが始まります。



図 2.38

12. 手順 3. で「はい」を選択した場合は、ユーザー登録の手順をご案内するレジストリウィザードが起動します。22 ページの手順 23. ~ 手順 25. を参考にユーザー登録を行ってください。
13. 「結果」ダイアログ (図 2.26) で「OK」をクリックします。以上で「ネットワークアドミニストレータ」セットアップは完了です。共有フォルダから PC にインストールを行うには、28 ページの「共有フォルダからのインストール」に進んでください。自動インストールのスクリプトを作成するには、29 ページの「スクリプトの作成」に進んでください。

共有フォルダからのインストール

「ネットワークアドミニストレータ」セットアップで共有フォルダ上にセットアップファイルをコピーしたら、以下の手順にしたがって共有フォルダから各 PC へのインストールを行います。

1. コンピュータの電源を入れ、Windows を起動します。Windows がすでに起動されている場合は、使用中のアプリケーションをすべて終了させてください。²¹
2. 「ネットワークコンピュータ」などで、セットアップファイルが置かれている共有フォルダを開き、「setup.exe」をダブルクリックしてインストーラを起動します。

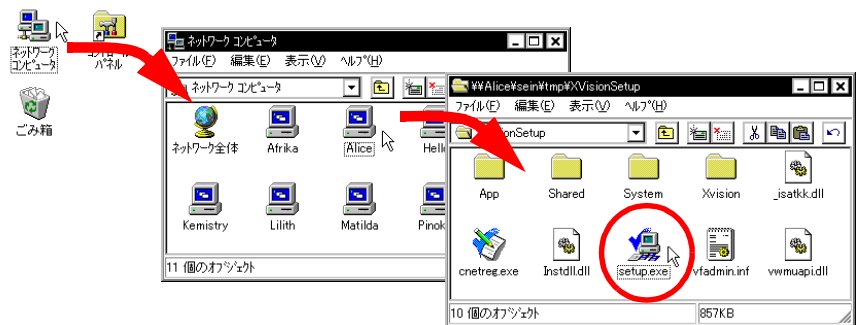


図 2.39

3. これ以降は、CD-ROM インストールの手順 4. 以降とほぼ同じですので、そちらをご覧ください。なお、手順 6. の「セットアップオプションの選択」では、選択肢が「標準」、「カスタム」、「コンパクト」、「ワークステーション」の 4 つになります。セットアップオプションの詳細については、13 ページの「2.2 セットアップオプション」をご覧ください。

2.3.3 自動インストール

自動インストールはネットワークインストールの一種で、あらかじめ管理者が作成しておいた「スクリプト」の内容にしたがって、ネットワーク共有フォルダから PC に半自動的なインストールを行う方法です。

スクリプトでは、「インストールするコンポーネント」や「インストール先」、「X サーバーを自動起動するか」など細かい指定が可能のため、複数の PC に同じ環境をインストールしたい場合に便利です。スクリプトは、「ネットワークアドミニストレータ」セットアップを実行することによって作成できます。

自動インストールを行うためには、あらかじめ CD-ROM から「ネットワークアドミニストレータ」セットアップを実行して、共有フォルダ上にインストールファイルをコピーし、さらに、もう一度「ネットワークアドミニストレータ」セットアップを実行し、スクリプトを作成しておく必要があります。自動インストールの手順は次のとおりです。

21. Windows NT または Windows 2000 をご使用の場合は、「Administrator」権限でログオンしてください。

1. 「ネットワークアドミニストレータ」セットアップを実行し、共有フォルダにセットアップファイル一式をコピーする（最初の一回だけ）
2. 「ネットワークアドミニストレータ」セットアップを再度実行し、インストールスクリプトを作成する（最初の一回だけ²²）
3. 各 PC から共有フォルダ上のインストーラを起動してインストールを行う。このときインストーラの起動オプションとして、スクリプト名を指定する（必要な回数繰り返す）

スクリプトの作成

自動インストールスクリプトの作成方法について説明します。ここでは、すでに一度「ネットワークアドミニストレータ」セットアップを実行し、共有ファイル上にセットアップファイルがコピーされているものと仮定します。

1. 24 ページの「ネットワークアドミニストレータ」セットアップの手順 1. から手順 9. までを実行します。なお、すでにユーザー登録を行っている場合は、26 ページの手順 7. で「いいえ」を選択してください。
2. 「インストールパス:」にセットアップ用共有フォルダのパスが表示されていることを確認し、「スクリプトの作成」をクリックします。



図 2.40

3. スクリプトファイルの名前を指定します。「参照」をクリックして選択することもできます。ファイル名はどんな名称でもかまいません。ここでは例として「autoinst.shh」という名前を指定しています。

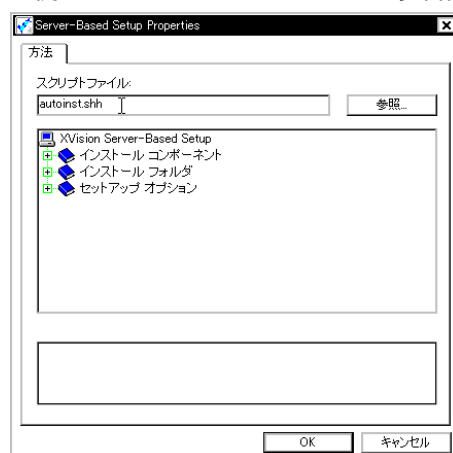


図 2.41

22. PC によってインストールする環境を変えたい場合、たとえば部署ごとに異なる設定をしたい場合は、環境の数だけスクリプトを作成し、自動インストールを実行するときに環境にあったスクリプトを指定します。

4. 必要なオプションを選択し、「OK」をクリックします。各オプションの詳細については、下の表をご覧ください。オプションを選択するには、各オプションの先頭にあるチェックボックスをチェックします。また、オプションによっては、オプションを選択するとダイアログ下部にテキストボックスが表示され、追加の情報（インストール先パスなど）を入力できるものもあります。

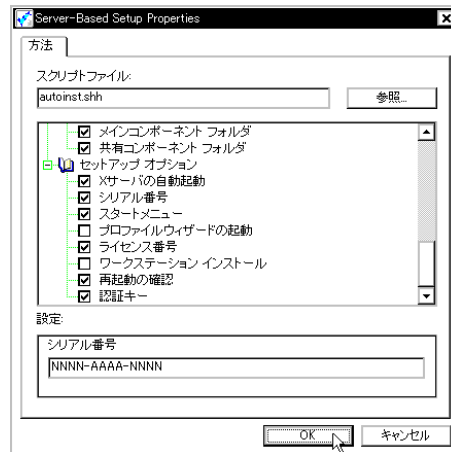


図 2.42

インストールコンポーネント	
チェックを付けたコンポーネントだけがインストールされます。 (* はデフォルトでチェックされているものを示します)	
X コンポーネント	<ul style="list-style-type: none"> • Open GL • Zones * • オーディオサーバ • シリアルライン X サーバ • ネットワーク X サーバ * • ヘルプファイル * • ローカル Motif ウィンドウマネージャ
X フォント	<ul style="list-style-type: none"> • 100DPI * • 75DPI * • Andrew • H3050 • HP * • ICL • Misc * • Oriental *
エミュレータと ホストブラウザ	<ul style="list-style-type: none"> • VT420 エミュレータ * • ホストエクスプローラ * • ホストマネージャ

インストールフォルダ	
「パス」欄でインストール先フォルダを指定します。	
メインコンポーネントフォルダ	デフォルトは「C:¥PROGRA~1¥VISION」
共有コンポーネントフォルダ	デフォルトは「C:¥PROGRA~1¥COMMON~1¥VISION」
セットアップオプション	
Xサーバの自動起動	Windows 起動時に X サーバを自動的に立ち上げる設定にするかどうかを指定します。デフォルトは「しない」です。
シリアル番号	シリアル番号を自動的に入力するかどうかを指定します。デフォルトは「しない」です。
スタートメニュー	スタートメニューをどのフォルダに作成するかを指定します。デフォルトは「CentreNET X Vision」です。
プロファイルウィザードの起動	自動インストール時に「プロファイルウィザード」を起動するかどうかを指定します。デフォルトは「しない」です。
ライセンス番号	ライセンス番号を自動的に入力するかどうかを指定します。デフォルトは「しない」です。
ワークステーションインストール	「ワークステーション」インストールを行うかどうかを指定します。デフォルトは「しない」。
再起動の確認	自動インストール完了時に再起動の確認を行うかどうかを指定します。デフォルトは「する」。
認証キー	認証キーを自動的に入力するかどうかを指定します。デフォルトは「しない」です。

5. 手順 2. の「インストールパス:」に表示されている共有フォルダにスクリプトファイル（ここでは「autoinst.shh」）とスクリプトを起動するためのショートカット（ここでは「autoinst」）が作成されます。



図 2.43

6. スクリプトの作成を終了するには、「キャンセル」をクリックします。別のスクリプトを作成する場合は、再度「スクリプトの作成」をクリックして上記の手順を繰り返します。

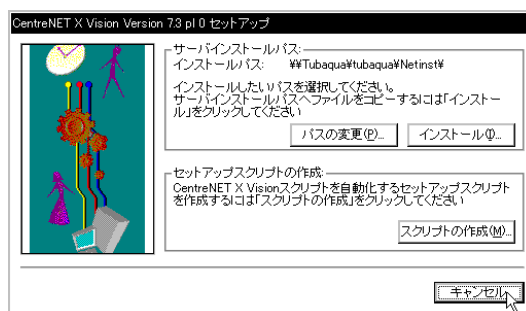


図 2.44

自動セットアップの実行

スクリプトを作成したら、以下の手順にしたがって、PC から自動セットアップを実行します。ここでは、29 ページの「スクリプトの作成」で作成した「autoinst.shh」スクリプトを例に説明します。

1. コンピュータの電源を入れ、Windows を起動します。Windows がすでに起動されている場合は、使用中のアプリケーションをすべて終了させてください。²³
2. 「ネットワークコンピュータ」などで、セットアップファイルが置かれている共有フォルダを開き、スクリプトファイル実行のためのショートカット（ここでは「autoinst」）をダブルクリックします。²⁴

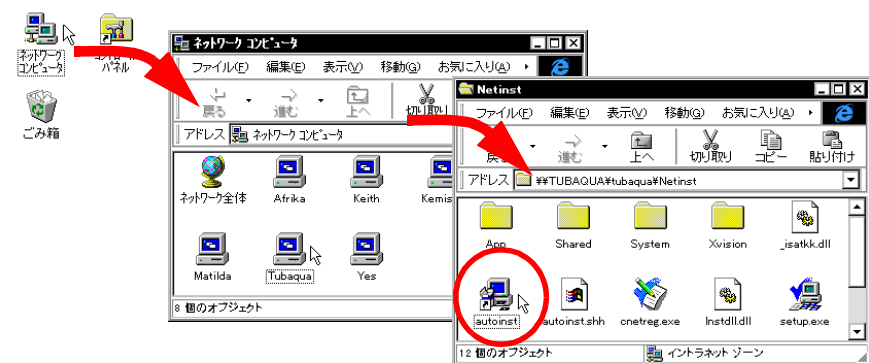


図 2.45

3. 自動インストールが開始されます。スクリプトの内容により、インストールの途中でユーザの入力を求めてくることがあります。その場合は、適宜回答してください。
4. スクリプトで「再起動の確認」が選択されていれば、インストール終了時に再起動を確認するダイアログが表示されます。同項目が選択されていない場合は、インストール終了とともにコンピュータが再起動されます。以上でインストールは完了です。35 ページの「3 動作確認」にお読みください。

23. Windows NT または Windows 2000 をご使用の場合は、「Administrator」権限でログオンしてください。

24. セットアップファイルが置かれている共有フォルダの「xvision¥setup.exe」の引数にスクリプト名を指定して実行しても同じことができます（注意：共有フォルダ直下の「setup.exe」ではなく、共有フォルダ下 xvision フォルダ内の「setup.exe」ですご注意ください）。

「ファイル名を指定して実行」などで「¥¥server¥netinstfolder¥xvision¥setup.exe ..¥script.shh」などと指定します。ここで server はファイルサーバー名、¥netinstfolder は共有フォルダのパス名、「..¥script.shh」はスクリプトファイルのパス名です。スクリプトファイルが setup.exe と同じフォルダに置かれている場合は、スクリプトファイルを（フルパスではなく）ファイル名だけで指定できますが、スクリプトファイルが setup.exe と別のフォルダにある場合は、スクリプトファイルを絶対パスまたは相対パスで指定します（上記の例「..¥script.shh」は相対パス指定です。絶対パスの例：¥¥server¥netinstfolder¥xvision¥setup.exe ¥¥server¥anotherpath¥to¥script2.shh」）

2.4 追加インストール

インストール後にコンポーネントを追加したい場合は、以下の手順にしたがってください。追加インストールは、「標準」でインストールを行った後で、「ローカル Motif ウィンドウマネージャ」を追加するような場合に行います。

1. CD-ROM (CD-ROM インストールの場合) あるいはネットワーク共有フォルダ (ネットワークインストールの場合) から `setup.exe` を起動し、画面の指示にしたがって進みます。
2. 「セットアップオプション」(16 ページの図 2.5) で「カスタム」を選択します。
3. 「Select Components」(18 ページの図 2.13) で、追加したいコンポーネントにチェックマークを付け、「次へ」をクリックします。

なお、インストール済みコンポーネントのチェックマークを外しても、アンインストールはされません。特定のコンポーネントのみをアンインストールしたい場合は、57 ページの「4 アンインストール」を参考に、すべてをアンインストールした後、「カスタム」セットアップで必要なコンポーネントだけをインストールしなおしてください。

4. 以下、画面の指示にしたがってください。

3 動作確認

インストールが完了したら、以下の手順にしたがって動作確認を行ってください。

動作確認は次の手順で行います。

1. コントロールパネルの確認 (p.36)
2. Vision サービスの動作確認 (p.37)
3. トランスポートの確認 (p.38)
4. 接続先 UNIX ホストの確認 (p.39)
5. セキュリティオプションの確認 (p.41)
6. X クライアントの起動 (p.43)

3.1 コントロールパネルの確認

X Vision をインストールすると、コントロールパネルに次の 3 つのアプレットアイコンが追加されます（下図は Windows NT 4.0 の画面例です）。以下の動作確認では、これらのアイコンを使用します。



図 3.1

Vision コミュニケーション



使用するトランスポートプロトコル、文字セットなど、X クライアント (UNIX ホスト) との通信に関する設定を行います。

Vision サービス



Vision サービスの設定を行います。Vision サービスは、ファイルアクセス、RPC、ソケットサービスなど、X Vision が必要とする各種サービスを提供するバックグラウンドプログラムです。

XVision プロファイル



X サーバーの設定である「プロファイル」の作成、修正、コピー、削除等を行います。X クライアントのある UNIX ホストの環境に合わせて、複数のプロファイルを作成することができます。

3.2 Vision サービスの動作確認

X Vision を使用するには、Vision サービスが動作している必要があります¹。Vision サービスはバックグラウンドで実行され、ファイルアクセス、RPC、ソケットサービスなどのサービスを提供します。

1. コントロールパネルの「Vision サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. 「サービス」フィールドの「シャットダウン」ボタンが黒く選択可能になっていることを確認してください。この場合、Vision サービスは正常に起動されています。

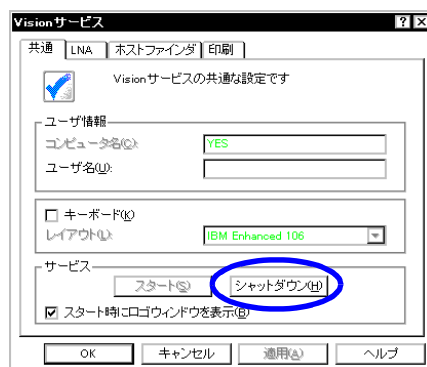


図 3.2

もし、「スタート」ボタンが黒く選択可能になっている場合は、Vision サービスが起動されていないので、クリックして Vision サービスを起動してください。

1. 通常のインストールでは、Vision サービスは、Windows の「スタートアップ」フォルダに登録され、Windows 起動時に自動的に起動されます。

3.3 トランスポートの確認

X Vision が使用するトランスポートプロトコルの設定を確認します。

1. コントロールパネルの「Vision コミュニケーション」アイコンをダブルクリックします。
2. 「トランスポート」タブを選択し、「TCP-Unix」の状態が「Enabled」になっていることを確認してください。



図 3.3

3.4 接続先 UNIX ホストの確認

接続先 UNIX ホスト (X アプリケーションがあるホスト) にログインできることを確認します。

1. デスクトップの「UNIX ネットワークコンピュータ」アイコンをダブルクリックします。



図 3.4

2. 接続したいホストが表示されている場合は、手順 4. に進みます。そうでない場合は、「ファイル」メニューの「新しいホスト」を選択します。



図 3.5

3. 「新規ホスト」が作成されるので、接続する UNIX システムのホスト名を入力します。



図 3.6

4. 接続したい UNIX ホストのアイコンをダブルクリックします。

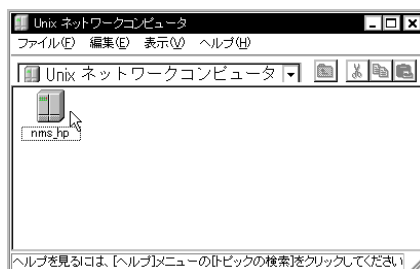


図 3.7

5. ログイン認証ウィンドウが表示されます。UNIX に登録されているユーザーのログイン名とパスワードを入力して「OK」をクリックしてください。

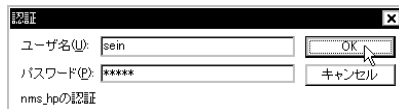


図 3.8

6. UNIX ホストのホームディレクトリが表示されれば、ログイン成功です。



図 3.9

3.5 セキュリティオプションの確認

デフォルトでは、図 3.8 のログイン認証画面は、初めて UNIX ホストにログインしたときにだけ表示され、以後のログイン時には表示されなくなります。この設定がセキュリティ上問題になる場合は、以下の手順にしたがって、セキュリティオプションを変更してください。

オプションは次の 3 つで、デフォルトは「パスワードリスト」です。

パスワードリスト

初回ログイン時に入力されたパスワードを、Windows のログオンユーザー別のパスワードリストファイル(*.vca)に保存します。パスワードリストには、ホスト名、ユーザー名、パスワードが格納され、2 回目以降のログインでは、パスワードの入力を求められません。これがデフォルトの設定です。

確認

アクセスごとにパスワードの入力を求められます。

固定

パスワードをホスト定義ファイル(*.hst)に保存します。ホスト定義ファイルは、ホストごとに作成され、該当ホストに関する各種設定値が保存されます。2 回目以降はパスワードの入力を求められません。

セキュリティオプションは、トランスポート単位またはホスト単位で設定することができます。ホスト単位のセキュリティオプションは、トランスポート単位のセキュリティオプションより優先されます。

トランスポートのセキュリティオプション

トランスポートのセキュリティオプションは次の手順で設定します。

1. コントロールパネルの「Vision コミュニケーション」アイコンをダブルクリックします。
2. 「トランスポート」タブで「TCP-Unix」を選択し、「プロパティ」をクリックしてください。

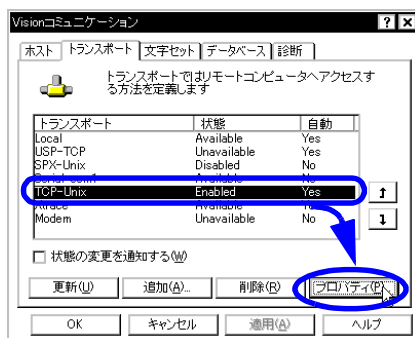


図 3.10

3. 「セキュリティ」タブの「確認」を選択し、リストボックスからセキュリティオプションを選択して「OK」をクリックします。



図 3.11

ホストのセキュリティオプション

ホストごとのセキュリティオプションは、次の手順で設定します。

1. コントロールパネルの「Vision コミュニケーション」アイコンをダブルクリックします。
2. 「ホスト」タブで任意のホストを選択し、「プロパティ」をクリックしてください。²

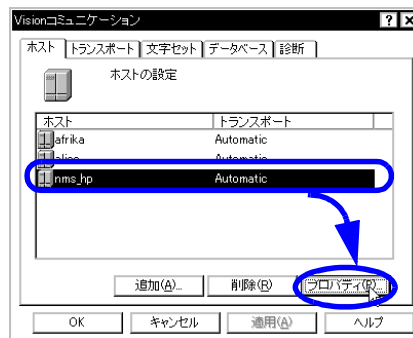


図 3.12

3. 「セキュリティ」タブの「確認」を選択し、ドロップダウンリストボックスからセキュリティオプションを選択して「OK」をクリックします。



図 3.13

2. ホストのセキュリティオプションは、「UNIX ネットワークコンピュータ」でホストアイコンを選択し、右クリックメニューの「プロパティ」「セキュリティ」タブと進んでも行えます。

3.6 X クライアントの起動

ここまでの確認が終わったら、X クライアントを起動してみましょう。X クライアントを起動するには、次のような方法があります。

XDM (X Display Manager)

X サーバーを起動し、xdm デモンが動作している UNIX ホストに接続すると、グラフィカルなログイン画面が表示されます。ここでログインし、X 環境を使用する方法です。

UNIX アプリケーションウィザード

「スタート」メニューの「UNIX プログラムの登録」から、起動したいアプリケーションを対話形式で設定して実行させます。設定を保存すれば、以後「スタート」メニューの「UNIX プログラムの一覧」から同じアプリケーションを何度でも実行できます。

リモートプログラムスタータ (RPS)

「スタート」メニューの「UNIX プログラムの実行」から、起動したいアプリケーションのパスなどを指定して実行させます。設定を保存すれば、以後「ファイル」メニューの「開く」で同じアプリケーションを何度でも実行できます。

3.6.1 XDM からの起動

ここでは、もっとも一般的な XDM ログインの手順として、ダイレクトモードで接続します。

プロファイルの設定

XDM ログインに適した設定になっているかどうかを確認します。

1. コントロールパネルの「XVision プロファイル」アイコンをダブルクリックします。
2. 「一般」タブでプロファイル名（たとえば XVision）を選択し、「プロパティ」ボタンをクリックしてください。

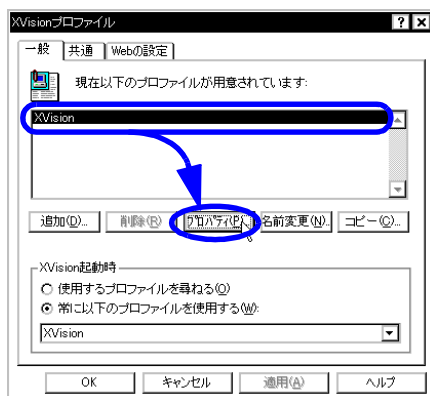


図 3.14

3. 「ディスプレイ」タブで、「シングルウィンドウ」を選択します³。



図 3.15

4. 「フォント」タブをクリックし、次のフォントがフォントパスに入っているかどうかを確認してください。

MISC、75DPI、100DPI、ORIENTAL、Global aliases、Windows Fonts



図 3.16

5. 「セキュリティ」タブをクリックし、「XDMCP」をチェックし、「ダイレクト」モードを選択し、ホスト名を入力してください⁴。

3. XDMを使うときは、必ず「シングルウィンドウ」を選択してください。
 4. ここでホスト名を入力しなかった場合は、X サーバー起動時に接続先ホスト名を尋ねられます。

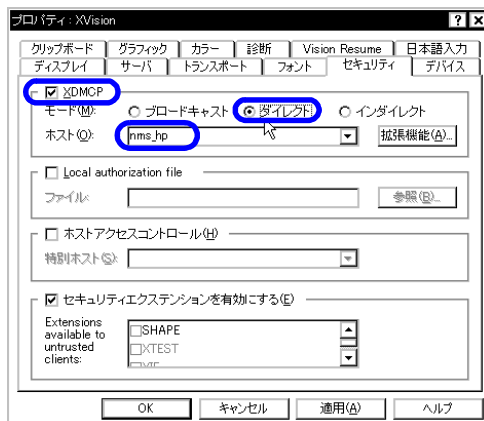


図 3.17

6. 「デバイス」タブをクリックし、接続先ホストに対応したキーマップ名を選択します。



図 3.18

7. 「日本語入力」タブをクリックし、必要に応じて「Windows の日本語入力を使用する」を選択します。

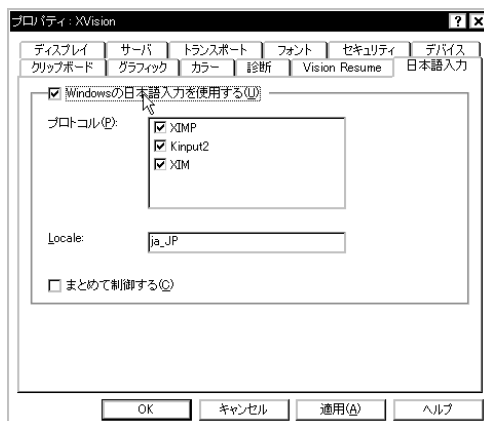


図 3.19

起動方法

以下の手順で XDM ログインします。

1. 「スタート」 「プログラム」 「CentreNET X Vision」 「CentreNET X Vision サーバ」と選択し、X サーバーを起動します⁵。
2. XDM のログイン画面が表示されますので、ログインする「ユーザー名」と「パスワード」を入力してください。



図 3.20

3. UNIX のウィンドウマネージャが起動します。

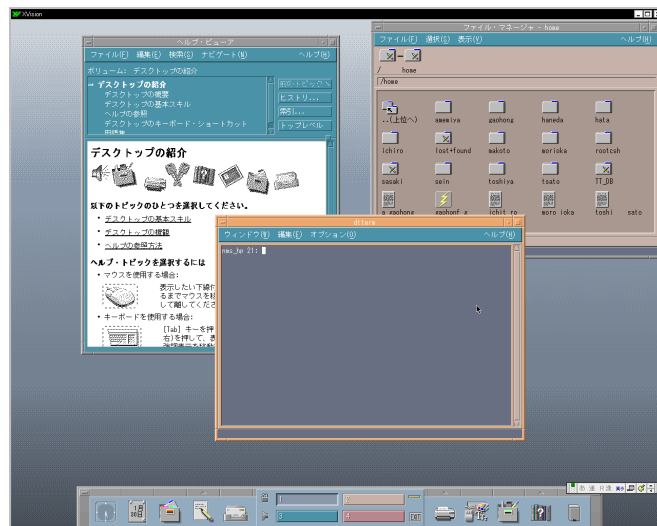


図 3.21

5. 初回起動時には、X Vision サーバーの描画ルーチンを最適化するよう促すダイアログが表示されます。詳細については、56 ページの「3.7 補足：X Vision の最適化」をご覧ください。

3.6.2 UNIX アプリケーションウィザードからの起動

UNIX アプリケーションウィザードから X クライアントを起動します。ここでは例として、日本語表示可能な端末エミュレータ「kterm」を起動する手順を示します。

プロファイルの設定

ウィザードからの起動に適したプロファイル設定になっているかどうかを確認します。ここでは、マルチウィンドウモードでの例を示します。

1. コントロールパネルの「XVision プロファイル」をダブルクリックします。
2. 「一般」タブでプロファイル名（たとえば XVision）を選択し、「プロパティ」ボタンをクリックしてください。

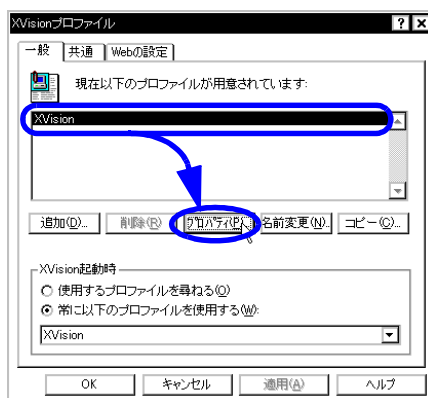


図 3.22

3. 「ディスプレイ」タブで、「マルチウィンドウ」を選択します。

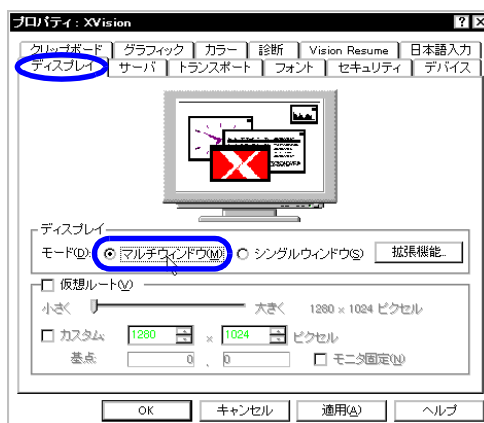


図 3.23

- 「フォント」タブをクリックし、必要なフォントが入っているかどうかを確認してください。

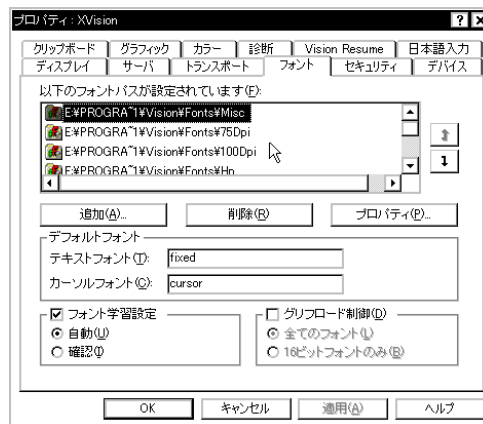


図 3.24

- 「セキュリティ」タブをクリックし、「XDMCP」がチェックされていないことを確認してください。

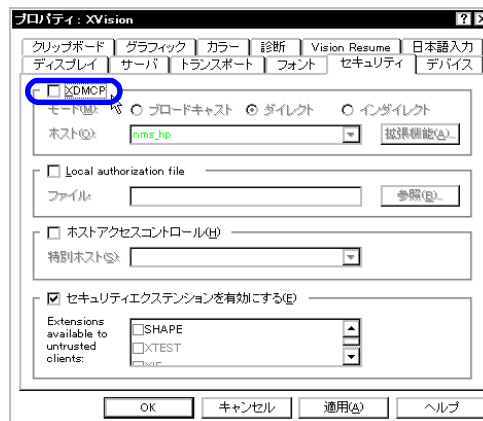


図 3.25

- 「デバイス」タブをクリックし、接続先ホストに対応したキーマップ名を選択します。



図 3.26

7. 「日本語入力」タブをクリックし、必要に応じて「Windows の日本語入力を使用する」を選択します⁶。

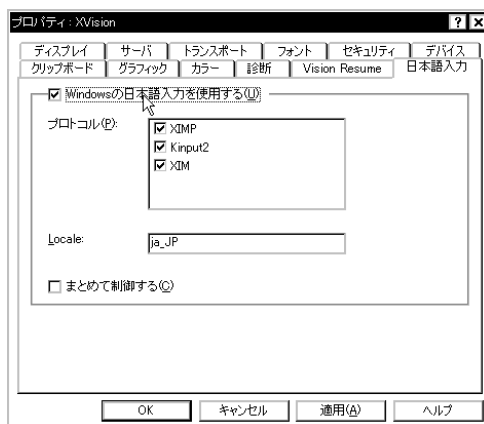


図 3.27

起動方法

以下の手順で X アプリケーションを起動します。

1. スタートメニューから「UNIX プログラムの登録」を選択します。
2. ウィザードが起動します。「次へ」をクリックしてください。



図 3.28

3. X アプリケーションのある UNIX ホスト名を入力（あるいは選択）して「次へ」をクリックします。



図 3.29

6. Windows の日本語入力を使用するためには、X クライアント側が X Vision のサポートする日本語入力インターフェースを備えている必要があります。X Vision は、kinput2、XIMP 3.5、XIM をサポートしています。

4. X アプリケーションのパス⁷を指定して「次へ」をクリックします。「参照」ボタンをクリックしてパスを選択することもできます。⁸



図 3.30

5. 「X アプリケーション」を選択し、「次へ」をクリックします。⁹



図 3.31

6. 「いいえ」を選択して、「次へ」をクリックします。ここで「はい」を選択し、試しに X アプリケーションを起動してみることもできます。



図 3.32

7. DISPLAY は自動的に設定されるので、-display オプションは指定しないでください。また、バックグラウンドで実行する & (アンパサンド) も指定しないでください。
8. セキュリティオプションの設定により、「参照」ボタンをクリックしたときにユーザー名とパスワードを聞かれることがあります。その場合は、UNIX ホスト上のユーザー名とパスワードを入力してください。
9. 「VT420 エミュレータ」は、コンソールアプリケーションを起動するときに選択します。「その他」は、ユーザーインターフェースを持たないデーモンプログラムなどを起動する場合に使います。

7. 任意の名前を付けて「完了」をクリックします。ここでは、名前を「kterm on alice」とします。これで、Xアプリケーションの起動設定が保存されます。



図 3.33

8. Xアプリケーションを起動するには、「スタート」メニューの「UNIX プログラムの一覧」から手順 7. で保存した名前を選択します。

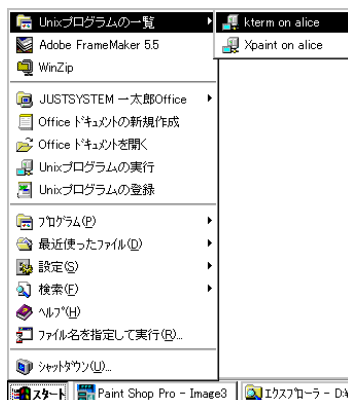


図 3.34

9. アプリケーションが起動します。¹⁰

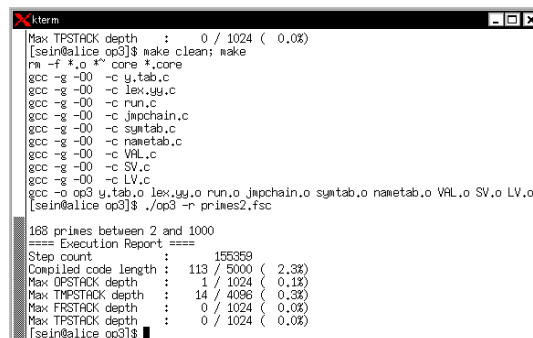


図 3.35

10. 初回起動時には、X Vision サーバーの描画ルーチンを最適化するように促すダイアログが表示されます。詳細については、56 ページの「3.7 補足：X Vision の最適化」をご覧ください。

3.6.3 RPS (Remote Program Starter) からの起動

RPS から X クライアントを起動します。ここでは例として、日本語表示可能な端末エミュレータ「kterm」を起動する手順を示します。

プロファイルの設定

RPS からの起動に適したプロファイル設定になっているかどうかを確認します。ここでは、マルチウィンドウモードでの例を示します。

1. コントロールパネルの「XVision プロファイル」をダブルクリックします。
2. 「一般」タブでプロファイル名（たとえば XVision）を選択し、「プロパティ」ボタンをクリックしてください。

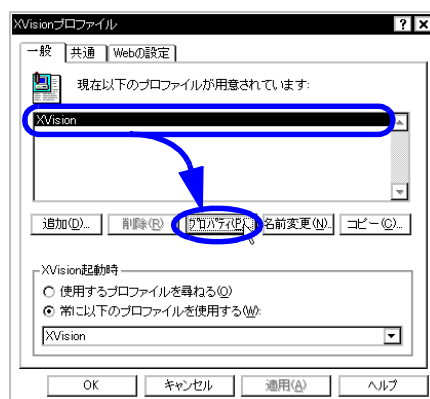


図 3.36

3. 「ディスプレイ」タブで、「マルチウィンドウ」を選択します。

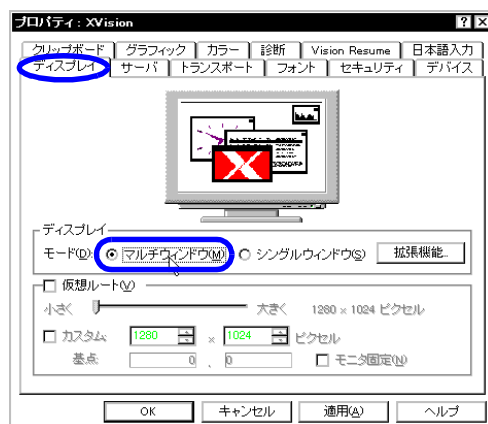


図 3.37

4. 「フォント」タブをクリックし、必要なフォントが入っているかどうかを確認してください。



図 3.38

5. 「セキュリティ」タブをクリックし、「XDMCP」がチェックされていないことを確認してください。

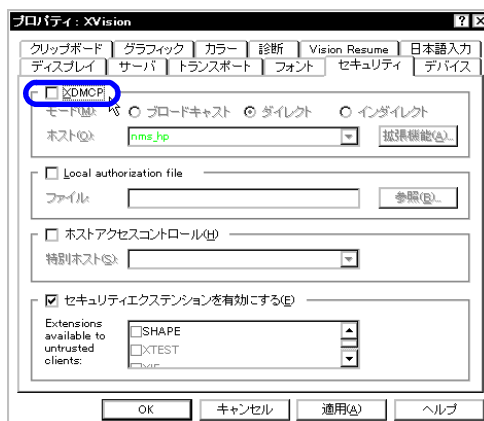


図 3.39

6. 「デバイス」タブをクリックし、接続先ホストに対応したキーマップ名を選択します。



図 3.40

7. 「日本語入力」タブをクリックし、必要に応じて「Windows の日本語入力を使用する」を選択します。

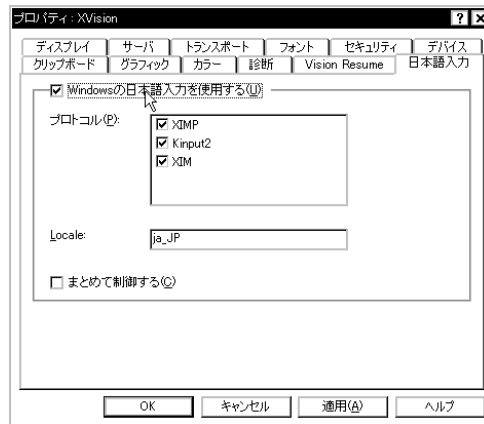


図 3.41

起動方法

以下の手順で X アプリケーションを起動します。

1. 「スタート」メニューの「UNIX プログラムの実行」を選択します。
2. RPS が起動します。「プロパティ」メニューから「ディスプレイ」を選択します。

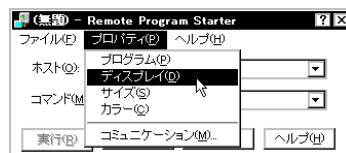


図 3.42

3. 「X のディスプレイ環境を設定」がチェックされていることを確認します。また、「X サーバを起動」にチェックを付け、ドロップダウンリストボックスからプロファイル名（たとえば XVision）を選択します。

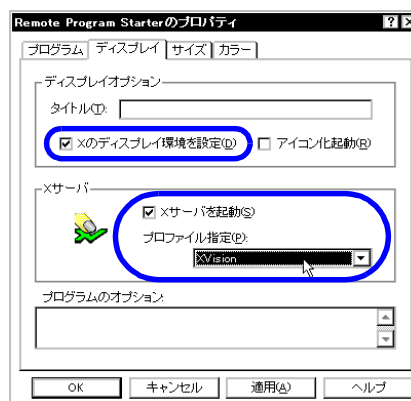


図 3.43

4. 「プログラム」タブを選択し、「ホスト」に UNIX ホスト名を、「コマンドライン」に実行するコマンドのパス¹¹を入力（または選択）して「OK」をクリックします。

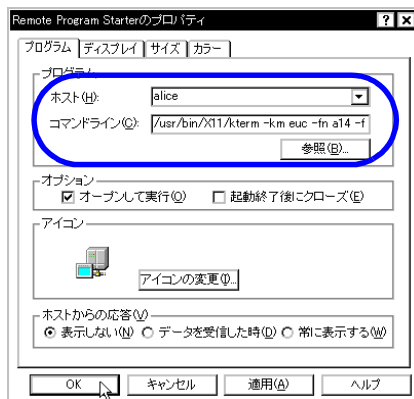


図 3.44

5. 「実行」をクリックします。



図 3.45

6. kterm が起動します。¹²



図 3.46

7. RPS の「ファイル」メニューから「名前を付けて保存」を選択すると、プログラムの起動設定をファイルに保存することができます。次回からは、RPS の「ファイル」メニューの「開く」で保存したファイルを指定すれば、プログラムを同じ方法で起動できます。

11. DISPLAY は自動的に設定されるので、-display オプションは指定しないでください。また、ジョブをバックグラウンドで実行する & (アンパサンド) も指定しないでください。

12. 初回起動時には、X Vision サーバーの描画ルーチンを最適化するように促すダイアログが表示されます。詳細については、56 ページの「3.7 補足：X Vision の最適化」をご覧ください。

3.7 補足：X Vision の最適化

初めて X サーバーを起動するときには、次のようなダイアログが表示されます。「はい」をクリックして、X Vision を最適化することをお勧めします。「はい」をクリックすると X Vision の描画性能を最適化するユーティリティが起動します。

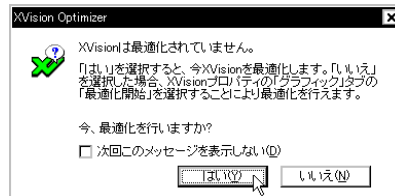


図 3.47

最適化処理の実行中は、マウスやキーボードを動かさないようにしてください。また、途中で終了させないでください。

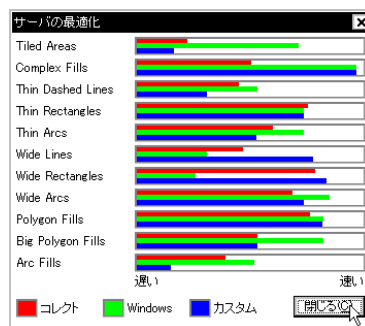


図 3.48

最適化処理が完了したら、「閉じる」をクリックします。

図 3.47 で「いいえ」をクリックした場合でも、コントロールパネルの「X Vision プロファイル」で任意のプロファイルのプロパティを表示させ、「グラフィック」タブの「最適化開始」をクリックすれば、最適化を行うことができます。

また、ビデオカードを交換したときなど、グラフィック表示環境を変更した場合にも、手動で最適化を実行することをおすすめします。

4 アンインストール

X Vision をアンインストールするときは、以下の手順にしたがってください。
Windows NT および 2000 の場合は、「Administrator」権限でログオンしてください。

1. コントロールパネルの「アプリケーションの追加と削除」をダブルクリックします。



図 4.1

2. 「インストールと削除」タブで「CentreNET X Vision 7.3 pl 0」を選択し、「追加と削除」をクリックします。



図 4.2

3. 「はい」をクリックします。

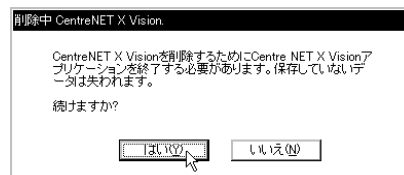


図 4.3

4. 「OK」をクリックします。

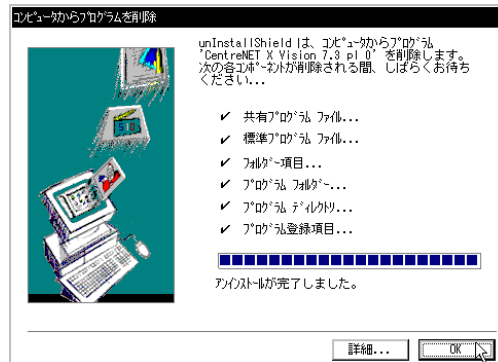


図 4.4

5. 「OK」をクリックします。

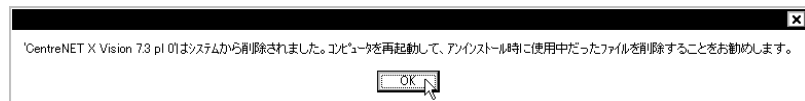


図 4.5

6. コンピュータを再起動してください。以上でアンインストールは完了です。¹

1. マルチユーザーの Windows 環境 (Windows NT/2000、および、マルチユーザー設定済みの Windows 95/98/Me) で、インストール時に「ユーザ単位で設定を保存する」(デフォルト。15 ページの図 2.4 を参照) を選択した場合は、アンインストールを実行してもユーザーごとの設定情報は削除されません。ユーザーごとの設定を削除するには、各ユーザーでログオンし、CD-ROM 内の「D:\sup\delenvw.exe」(CD-ROM ドライブが「D:」のとき) を実行し、ダイアログに「はい」と答えてください。

5 ライセンスアップグレード

CentreNET X Vision (通常版) から CentreNET X Vision Cubic (3D 対応版) へのアップグレードライセンス「CentreNET X Vision Cubic Upgrade」をご購入された場合に、ライセンスをアップグレードするための方法を説明します。

また、お試し版(評価版)としてインストールした後で、ライセンス版にアップグレードするための方法についても説明します。

Topics:

X Vision から X Vision Cubic へのアップグレード (p.60)

お試し版からライセンス版へのアップグレード (p.61)

5.1 X Vision から X Vision Cubic へのアップグレード

ここでは、通常版の CentreNET X Vision をインストール済みであると仮定します。3D 版 (X Vision Cubic) へアップグレードするには、以下の手順にしたがってください。

1. 「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」を選択し、「D:¥sup¥2d_3dlic¥xvision3d_license_upgrade.bat」(CD-ROM ドライブが「D:」の場合) と入力して「OK」ボタンをクリックします¹。



図 5.1

2. CentreNET X Vision (通常版) のシリアル番号 (S/N)、認証キー (A/K) と、CentreNET X Vision Cubic Upgrade のライセンス番号 (L/N) を入力して「OK」をクリックします。



図 5.2

3. 「OK」をクリックします。以上でライセンスアップグレードは完了です。

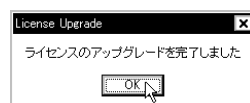


図 5.3

1. エクスプローラ等で「D:¥sup¥2d_3dlic¥xvision3d_license_upgrade.bat」(CD-ROM ドライブが「D:」の場合) をダブルクリックしてもかまいません。

5.2 お試し版からライセンス版へのアップグレード

ここでは、CentreNET X Vision（通常版）をお試し版としてインストール済みであると仮定します。CentreNET X Vision Cubic（3D版）をお試し版としてインストールした場合は、以下の「X Vision」「通常版」を、それぞれ「X Vision Cubic」、「3D版」に読み替えてください。

お試し版から正式ライセンス版へアップグレードするには、以下の手順にしたがってください。

1. 「スタート」メニューから「プログラム」「CentreNET X Vision」「CentreNET X Vision ライセンスアップグレード」の順に選択します。

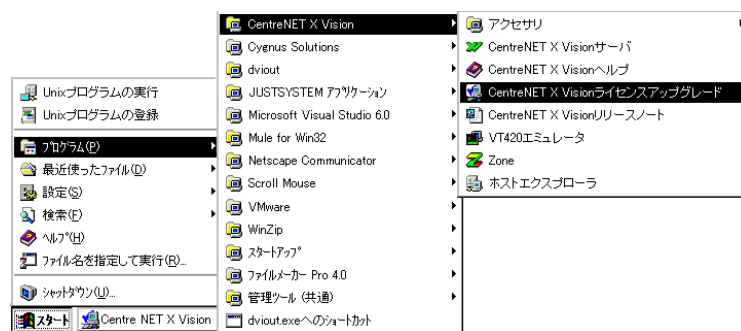


図 5.1

2. CentreNET X Vision（通常版）のシリアル番号（S/N）、認証キー（A/K）、ライセンス番号（L/N）を入力して「OK」をクリックします。

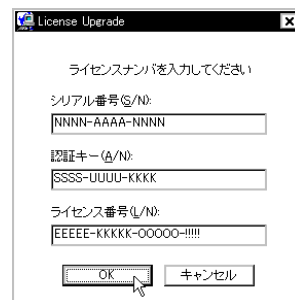


図 5.2

3. 「OK」をクリックします。以上でライセンスアップグレードは完了です。

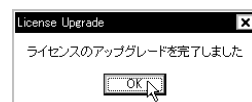


図 5.3

6 注意 / 制限事項

CentreNET X Vision Ver.7.3 を使用する上での注意事項ならびに制限事項について説明します。ご使用前によくお読みください。

Topics:

注意事項 / 制限事項 (p.64)

既知の問題点 (p.67)

6.1 注意事項 / 制限事項

6.1.1 インストール / アンインストール

ユーザー別設定情報のアンインストール (Windows NT/2000)

マルチユーザーの Windows 環境 (Windows NT/2000)¹ で、インストール時に「ユーザ単位で設定を保存する (推奨)」(15 ページの図 2.4) を選択した場合、アンインストールを実行してもユーザー別設定情報は削除されません。ユーザー別設定情報を削除するには、各ユーザーでログオンし、CD-ROM 内の「%sup%delenvw.exe」を実行して、確認を求めるダイアログに「はい」と答えてください。

自動インストール用スクリプト作成時のシリアル番号入力について

自動インストール用スクリプトを作成するとき (29 ページの「スクリプトの作成」を参照)、シリアル番号、認証キー、ライセンス番号は、ハイフンも含めて入力してください。

自動インストール用スクリプト作成時のインストール先指定について

Windows NT 3.51 への自動インストールを予定している場合、スクリプト作成時にインストール先を指定するときは、ロングファイルネームを使わないよう注意してください。

インストーラの「Browse」メニュー (Windows NT 3.51)

Windows NT 3.51 では、インストール起動画面の「Browse」メニューは使用できません (クリックしても何も起こりません)。

インストーラの「Readme」メニュー

インストール起動画面の「Readme」を読むには、Web ブラウザが必要です。

6.1.2 X Vision サーバー

Windows NT 3.51 でのフルスクリーンモード

Windows NT 3.51 でフルスクリーンのシングルウィンドウモードを使用する場合、システムメニューを表示させるには、「Alt」+「Space」を押してください。

Focus follows mouse

「Focus follows mouse」は Windows 98/Me/2000 では使用できません。

Focus follows mouse と MS-DOS プロンプト

「Focus follows mouse」が有効な場合、MS-DOS プロンプトがフォーカスを得ると、必ず MS-DOS プロンプトのウィンドウが最前面に表示されます。

1. Windows 95/98/Me でも、コントロールパネルの「ユーザ」でマルチユーザーで使用する設定にすれば、Windows NT/2000 と同様となります。

Matrox Millenium II での表示不具合対策

ビデオカードに Matrox Millenium II を使用していて X アプリケーションの表示に不具合が生じた場合は、Windows の画面のプロパティ (デスクトップを右クリック、あるいは、コントロールパネルの「画面」をダブルクリック) で「Powerdesk Performance」の「Use Device Bitmaps Caching」オプションを無効にしてください。

マルチモニタ機能 (Windows 98/2000/Me)

マルチモニタ環境でマルチウィンドウモードを使用する場合、プライマリディスプレイは必ず左上の位置に設定しなくてはなりません。もし左上にない場合は、モニタを左上の位置に設定した後で、X Vision を再起動してください。

6.1.3 ゾーン

Windows NT 3.51

Windows NT 3.51 では、ゾーンは使用できません。

6.1.4 XVision スパイ

フォントサーバー

X セッションの記録中には、フォントサーバーを使用しないでください。

6.1.5 端末エミュレータ

SCO OpenServer Release 5 への rlogin

TCP-UNIX を使用して、端末エミュレータで SCO OpenServer Release 5 に rlogin 接続している場合、Ctrl-D では接続を切断できません。

ActiveX ドキュメントコンテナ

端末エミュレータを ActiveX ドキュメントコンテナアプリケーション内で使用している場合、端末エミュレータの印刷機能は使用できません。

Microsoft Word や ActiveX コンテナアプリケーションに埋め込まれた端末エミュレータでは端末エミュレータのコンテキストヘルプは機能しません。また、埋め込まれた端末エミュレータでは、使用できるツールバーのアイテムに制限があります。

拡張キー

矢印キーや編集用のキーのような拡張キーは正しく再生できません。

ツールバーの設定画面

ツールバーの設定画面で端末オプションを選択したときに、VT420 の画面が白く表示されることがありますが、動作には影響ありません。

6.1.6 ホストエクスプローラ / ホストマネージャ

日本語ファイル名

ホストエクスプローラ / ホストマネージャは日本語ファイル名に対応していません。

Windows NT 3.51

Windows NT 3.51 では、ホストエクスプローラをインストールおよび使用することはできません。

6.1.7 マルチユーザー Windows 環境

LPD 印刷

マルチユーザーの Windows 環境 (Windows NT/2000²) で、同一 PC に異なるユーザー名でログインした場合、LPD の印刷はできません。

6.1.8 X Vision Cubic 固有の制限事項

GLX エクステンションとバッキングストア

GLX エクステンションとバッキングストアは併用できません。

OpenGL エクステンション

OpenGL エクステンションはサポートしていません。

Windows NT 3.51 は未サポート

X Vision Cubic は、Windows NT 3.51 をサポートしていません。

6.1.9 サポート対象外の機能

以下の機能 / アプリケーションは弊社サポートの対象外となっております。プログラム中やオンラインヘルプ、マニュアル等で以下の機能 / アプリケーションに言及している箇所がありますが、これらはすべてサポート対象外です。あらかじめご了承ください。

- オーディオサーバ
- Vision Resume
- メッセージパッド
- XRemote
- ユーザビューワ
- アドミンアップデート
- UNIX から PC への印刷 (RPC プロトコルを使用した場合。LPD は可)
- PC から UNIX への印刷 (RPC プロトコルを使用した場合。LPD は可)
- UNIX コンポーネント
 - ネームスペースマネージャ (NSM)、Vision Resume Server、SuperVision、XRemote など

2. Windows 95/98/Me でも、コントロールパネルの「ユーザ」でマルチユーザーで使用する設定にすれば、Windows NT/2000 と同様となります。

6.2 既知の問題点

6.2.1 オンラインヘルプ

ホストエクスプローラ / ホストマネージャ

ホストエクスプローラ / ホストマネージャの「表示」「オプション」で表示される「ファイルタイプ」および「関連付け」タブのヘルプとコンテキストヘルプは英語のままです。

ゾーンコントローラ

ゾーンコントローラの画面上にあるコンテキストヘルプボタンは押しても反応しません。

6.2.2 ホストエクスプローラ / ホストマネージャ

Windows からホストエクスプローラへのファイル移動

ホストエクスプローラを使って、Windows 上のファイルやフォルダを UNIX ホストへ移動する場合は、次の手順で行ってください。

1. ホストエクスプローラ上で移動したいファイルやフォルダを選択します。
2. 右ボタンを押しながら移動先までドラッグし、右ボタンを離します。
3. ポップアップメニューから「移動」を選択します。

次の方法では「移動」ではなく「コピー」になりますので、ご注意ください。

- エクスプローラでファイルやフォルダを選択し、キーボードで切り取り (Ctrl + X)、ホストエクスプローラで貼り付け (Ctrl + V)
- エクスプローラでファイルやフォルダを選択し、右メニューで「切り取り」、ホストエクスプローラで「貼り付け」
- ホストエクスプローラでファイルやフォルダを選択し、メニューで「切り取り」、移動先で「貼り付け」

空白入りファイル名とホストマネージャ

ホストマネージャを TCP-UNIX トランスポートで使用する場合、ファイル名やフォルダ名に空白を入れて登録や変更を行うと、一般保護違反でホストマネージャが終了してしまいます。

ホストマネージャを使用するときは、空白の入ったファイル名やフォルダ名を使用しないでください。または、ホストエクスプローラを使用してください。

ファイルのコピーや移動に失敗する

ホストエクスプローラ / ホストマネージャで、ファイルのコピーや移動を行おうとするとエラーが表示されて失敗することがあります。その場合は、転送モードオプションを正しく設定してください。

Windows エクスプローラの異常終了

フロッピーディスクの容量よりも大きいファイルを、ホストエクスプローラ / ホストマネージャから Windows エクスプローラの FD にコピーすると、Windows エクスプローラが異常終了することがあります。

6.2.3 端末エミュレータ

印刷プレビュー画面のボタン

端末エミュレータの印刷プレビュー画面で、操作ボタンの文字が英語で表示される場合があります。

6.2.4 ゾーン（仮想デスクトップ）

Windows 2000 での問題

Windows 2000 での使用中、ゾーンエリアを移動後に、Windows の「スタート」メニューから「設定」や「検索」を選択すると、枠だけ表示されて文字が表示されないことがあります。

その場合は、タスクバーを右クリックして「プロパティ」を選択し、チェックボタンのいずれかをチェックしてまた外すというように、設定自体は変更しませんが「適用」ボタンが有効になるようにして「OK」をクリックしてください。これでメニューの文字が表示されるようになります。

6.2.5 CentreNET AT-TCP/32 シリーズ

AT-TCP/32 のプリンタサーバ起動時のエラーメッセージ

X Vision のインストール後に、弊社 CentreNET AT-TCP/32 シリーズのプリンタサーバを起動すると、「ソケットアドレスの設定に失敗しました。[10048] Address already in use」というエラーメッセージが表示されます。この場合、次のいずれかの方法で回避してください。

1. 同時に使用しない
2. AT-TCP/32 の「プリンタサーバ」が使用するポート番号を変更する。「プリンタサーバ」の「オプション」 「オプションの設定」メニューで、「LPR サーバ時のポート番号」をデフォルトの 515 から別のポート番号に変更します。
3. X Vision の印刷機能（LPR サーバ機能）を使用しないのであれば、「Vision サービス」の設定で印刷機能を無効にする。「コントロールパネル」 「Vision サービス」 「印刷」タブの「設定を有効にする」のチェックマークを外してください。

6.2.6 X Vision Cubic 固有の問題点

True カラーでの GLX カラーインデックスビジュアル

True カラーディスプレイでは、GLX のカラーインデックスビジュアルは、デフォルトビジュアルに Pseudo Color を選択したときしか有効になりません。

256 色表示での OpenGL アプリケーション

OpenGL アプリケーションを 256 色ディスプレイで実行したときに色の問題が発生した場合は、X Vision のデフォルトビジュアルクラスを TrueColor に設定すると改善される可能性があります。「X Vision プロパティ」 「カラー」タブ 「デフォルトのビジュアルクラスを固定する」を選択します。

Windows NT 4.0 ではサービスパック 4 以降を推奨

X Vision Cubic を Windows NT 4.0 にインストールする場合は、あらかじめサービスパック 4 (SP4) 以降をインストールしておくことをお勧めします。サービスパック 4 以降では、OpenGL に関するいくつかの問題が修正されています。

Matrox Millenium と 16 ビットカラー

Matrox Millenium ビデオカードの 16 ビットカラーでは、OpenGL アプリケーションの実行および表示が正しくできないことがあります。Matrox では、この件に関する情報を公開しています。

True カラーでのアプリケーション実行

True カラーディスプレイでアプリケーションの実行に問題が発生する場合は、色数を 256 色に変更すると改善される可能性があります。

i810 チップセットでの異常終了

i810 チップセット搭載機で、画面を High カラーまたは True カラーに設定している場合、X サーバー起動時に異常終了することがあります。この場合、次のいずれかの方法で問題を回避できます。

1. 画面設定を 256 色に変更する
2. Windows 98 では、画面設定（「コントロールパネル」 「画面」アイコン 「設定」タブ 「詳細」ボタン 「パフォーマンス」タブ）で、「ハードウェアアクセラレータ」の設定をデフォルトの「最大」から 1 つずつ下げていく
3. X サーバーの 3D モードを無効にする（XVision プロパティの「サーバ」タブ 「拡張機能」の「GLX」エクステンションのチェックを外す）。この場合、3D アプリケーションを使用できなくなります。

